

九九 辭世漫談

辭世といふのは、文字通り世を辭する、すなはち人生の終焉を告ぐるといふことであると共に、また其最期の場合に、己れの過去未來の事象や、死といふものに就ての感想を述べた詩文、歌句の類をも、併せて辭世と稱するのであります。それが人間として甚哀しかるべき絶命の間際に在て、悠々と風蕩を示すところに、最詩趣あり、また彼の生存中に豫め認められてある遺言狀の類と異つてゐる所なので、遺言狀の慎重で現實的であるに比し、これは咄嗟で風流的であり、僅々數文字乃至數十文字が、よく其人の全生涯を極めて雄辯に説き示す言葉の花であり、以て玩味すべく、以て尊敬すべき點を見るのであります。軍書などを讀みますと、味方同士が戰敗れて差違へて死ぬ時に、一方が下の句を高らかに讀み上げると、一方が上の句を付けるといふ恐ろしく派手な合作の辭世などがありますが、しかしかく辭世の全部といふ全部が必

臨終の時に叫ばれたもののみではなく、中には豫め平常の覺悟を書いて懐にしたものなどもないとは言へません。現にある私の知人は、まだ若い人ですが『君こんな辭世を作つて見たが、下の句をも少し悲しくする工夫はあるまいか』なんて相談に來たり、もつと甚いのは『君辭世の面白いのはないか、何ぞ作つて置きたいのだが、一寸代作して呉れないか』『そりやイヤンよ、外のものなら兎に角、辭世ばかりは自分で製するから、そこですなはち自製といふのだ……』これではまるで掛合漫才ですが、宮崎玉緒といふ人は辭世の短冊を何枚も書いた、私も持つてゐますが、それには「南無妙トホカミアーメン陪佛」と題して、

天をのみ地を喰て活た返禮に命一つは安いものなり

玉緒辭世

と書いてある。此人は京都の人で官家に仕へた國學者で、著書も多く、明治廿九年に歿してゐますが、随分呑氣な話です。辭世の短冊といへば、紀三井寺の瀧之坊には、幕末の劍豪、佐々木只三郎の短冊が、寫しではあるが、辭世といふ題で

朽はつるかばねの上に草むさばわが大君の駒にはませむ

としたのがあります。辭世の風變りなものには、鹽井雨江文學士が、大正二年終焉に際して、古來辭世は概ね一首と限つてゐるが、自分は百首を讀んでみよう、と言つて八十五首に至つて遂

に仆れたといふ話があります。また纏まつた——といふのも可笑しいですが、聯合の辭世では、彼の豊臣秀次の遺族及局方三十餘人の斬られた時、お松の方十二歳といふのを最年少として、三十人で三十一首の辭世を残したことが記録に傳はつてをります。

さて、これから先哲偉人の辭世を、大體類別して述べませうが、まづ平生の言葉即辭世であると稱して、俳聖芭蕉は

昨日の句は今日の辭世、今日の句は明日の辭世、我生涯言ひ捨てたる句一として辭世ならざるはなし。

と、かう道破し、若州小濱の國學者で、著書四百卷に上るといふ伴信友は、之に倣つたか、

いまには何をかいはむよの常にいひし言葉ぞ我心なる

と詠んでをります。それから次に人生を夢と觀じたものに、澤庵和尚は臨終に當り、弟子共が御辭世をと請うた時筆を採つて、唯「夢」と一字を書き、

又豊太閤の辭世は有名な、

露の世に露と消えぬる我身かな難波の事は夢の世の中

といふのであり、貝原益軒は、

越方は一夜ばかりの心地して八十路あまりの夢を見しかな

といひ、三代目市川團藏のは

けふも夢寝ても起きても夢の夢夢に夢見る夢の世の中

戯作者の並木五瓶は、

泡雪やげにさまざまの夢の果

とかういつてをります。

次に夢と観するのとは、聊異點がありまするが、一つの生死觀として、一休和尚の歌と稱せらるるものに

今迄は死なれぬ程に生くるなり死なるゝ程に死ぬるなりけり

といふのがあります。中々意味が深いやうですが、大阪の俳人、小西來山は

來山は生れたとがで死ぬるなりそれで怨みも何もかもなし

江戸の俳人、立羽不角は

空蟬はもとの裸にかへりけり

これは還元論です。また明治の儒者で詩人であつた依田學海翁は、

我未_レ生時何_ゾ有我 我_レ將_ニ死處我_レ將_ニ無

偶然寫出偶然滅 水月鏡花一幅圖

といひ、今の佐佐木信綱博士の殿父弘綱翁は

命あらば嬉しからまし若しなくばそれも術なし神にまかせむ

と悟つてゐます。また悟りきつた一代の高僧でありながら、臨終の時に唯一言『死にたくな
い』というたのは、一休和尚ともいひ、博多の仙崖和尚だともいひますが、これは單り和尚
に止まらず、恐らくは千人が千人其心持ちであらうと思ひます。死を淋しがつた方面の辭世に
源三位頼政は、

埋木の花さくこともなかりしにみのなる果てぞあはれなりける

頼政の最期に就ては哀れな物語が傳つてをります。また水戸黄門光圀は一代の英傑を以てしな
がら、

子規誰も一人は淋しきにわれを誘へ死出の山路に

といひ、また忠臣藏の淺野内匠頭長矩が、切腹仰付けられた時、

風さそふ花よりも猶我はまた春の名残をいかにとやせん

と詠んだのは、周知のことでありませう。元祿の俳女として高名な田捨女は、

秋風の吹きくるからに糸柳、心細くも散る夕かな

といひましたが、先年私が捨女の傳記を公にしました時、井上通泰先生は此の歌を採つて、拙著の題に

糸柳散りし夕べにかくばかり末榮えんと思ひかけきや

と詠んで下さいました。これは捨女の遺裔に田艇吉翁や田健治郎男の如き名家を出したことなので、辭世もかうなるとまた後世に活用されるといふことになります。また寛政三奇人の一
林子平は

救ふべき力のかひもなか空の恵みに洩れて死ぬぞくやしき

といひ、幕末の歌人、井上文雄は

老いはてゝ命を惜しと思はねど死ぬと思へば悲しかりけり

と、はつきり悲觀し、平田篤胤は、

思ふこと一つも神に勤め終へずけふはまかるかあたら此世を

といひ、吉田松陰は、其偉大を以てして尙、

親を思ふ心に勝る親心今日の音信何と聞くらむ

と孝情の切々たるものを示し、これ等は何れも淋しいといふ純情の現はれであります。

次に身後の名を惜んだものに、新納忠元があります。島津義久の臣で、豊臣秀吉のために島津氏が征服せられた時にも、忠元単り頑張つたといふ人、

誰がための名なれば身より惜むらむ果敢なきものは武夫の道

名が大切だといふ、武士の心持。それから土佐の國士で、幕末の志士、豊永斧馬の、

白露の消ゆる我身は惜からで惜しきは後の名のみなりけり

といふのと全く異巧同曲であり、また明治元年、事に坐して自殺した當年の俊傑、川路聖謨は、

雪に折るゝ松となるとも丈夫の兒の手柏の裏表すな

なども、男子の意氣を示したものとといふべきでせう。

次に國のため、君のため、いはゆる殉難のものの中々數が多く、維新志士の歌は殆ど其の氣持で、高唱されてあります。其中の若干を申しますと、田中河内介は、

ながらへてかはらぬ月を見るよりも死して拂はむ代々のうき雲

平野國臣は、

大君に捧げまつりしわが命今こそ捨つる時は來にけり

梅田雲濱

君が代を思ふ心の一筋に我身ありとも思はざりけり

齋藤監物

國のため積る思ひも天津日にとけて嬉しき今日の泡雪

これは彼の櫻田門外で、井伊大老を刺した時の詠歌であります。僧月照が西郷隆盛と相擁して海に投じた時の辭世は、餘りにも有名な

大君のためには何か惜からむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも

曇りなき心の月の薩摩漏沖の浪間に今ぞ入りぬる

また天誅組の棟梁松本奎堂は、

君がため命死にきと世の人に語りつぎてよ峰の松風

峰の松風の第五句、よく締つて専門の歌詠みも三舍を避けませう。長州の藩老、國司信濃はよしやよし世をさるとも我が心御國のために尙盡さばや

死後尙報國の精神凜乎たることを唱へてをります。志士の詠歌は際限がありませんから、彼の暮末の頃、横濱岩龜樓の遊女であつた喜遊が、勤め中に米人某の爲めに迫られ、主人より強ひられた時、最後手段として、

露をだに厭ふ大和の女郎花降るあめりかに袖は濡らさじ

と一筆を遺して自刃したといふ。多く人口に膾炙した辭世の歌を以て結び、次には人生を櫻の花の散ることに事寄せた述懐について申しますと、彼の蒲生氏郷が豊臣秀吉のために睨まれて、最期を覺つた時、

限りあれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風

と詠み、この辭世には流石の秀吉も暗然としたといふことであります。また佐久間象山は、

時に逢はゞ散るもめでたし山櫻めづるは花の盛りのみかは

中島木鶏——幕府の下田奉行の與力であつた——は

嵐ふく夕の花ぞめでたかる散らで過ぐべき世にしあらねば

次に熊本神風連の志士、二十歳の青年を以て討死した渡邊唯次郎

昔より春ごとに咲く櫻花散らずばなどか人の惜しまむ

それから山口藩の志士で、海防に盡力した山田亦助

散るもよし吉野の山の山櫻花にたとへし武士の身は

何れも皆、花は櫻、人は武士の同じ趣でありますが、熊本の神道家で、多くの傑士を門弟に持った林有通が其の死に臨んで、

いかばかり今日の別れの惜しからむ散らぬ花さく此世なりせば

といつたのは、彼の太田道灌が、

かゝる時こそ命の惜しからむかねてなき身と思ひ知らずば

といつたのと暗合したものでありませうか。

次に數ある辭世のうちにも、どうも後の世のこと、すなはち更生を詠んだものは、割合に少く、仙臺の俳人、遠藤曰人が、

行て逢はむ孔子貫之義之芭蕉

といひ、京都の俳人、早川丈石が、

極樂に誕生の日は今日なれや

といつたのは面白く、太田垣蓮月の、

願はくは後の蓮の花の上にくもらぬ月を見るよしもがな

といふのがある位のやうで、やはり現實に觸れたことの方が多しやうであります。あまり堅いのばかり續きましたから、こんどは少々軟かい方を申上げませう。辭世の歌や句といふよりも、寧ろ普通の文學上の歌や句として味はへるものが澤山あります。井原西鶴の、

浮世の月見過ごしにけり末二年

この人は大阪の文豪で俳人で、一日に二萬三千句を吐いたといふ、吐いたとはよくいう言葉で、こんなに澤山句が出れば一々吟じるよりも寧ろ吐くのでありませう。元祿に五十二歳で死んだので、人生五十を末二年は見過ぎたといふのです。江戸の俳人、岩本乾什が、寶曆に八十で歿し、

雪解けや八十年の作りもの

と、自分の死を雪達摩の解けたのに置き、また伊勢の俳人で、一日三千句を詠じて三千風と改名した大淀三千風、此人のは、

今日ぞ早や見ぬ世の旅へ衣がへ

また高崎の俳人、宮處西馬の、

名月の方へ轉ばす枕かな

など、何れも實に洒々落々として、何等の屈託なく、如何にも怡々然たる趣があります。それにつゞいては、女流俳家加賀の千代が、

月を見て我は此世をかくく哉

といつてをります。昔の人が手紙の終りにかくくと書いた、それを指したのであります。

また明治の文豪、尾崎紅葉が、

死なば秋露の干ぬ間ぞおもしろき

というたのも、同じく風流の趣が通つてゐますが、正岡子規の、

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

に至つては、そこに凄壯の氣が漂うて、あまりに深刻で、和やかな氣味では味ひかねると思ひます。歌の方では久坂玄瑞が、

けふもまた知られぬ露の命もて千年を照らす月を見るかな

とは、大きなところを捉へたもので、明日をも知れぬといふところを、けふも知られぬ命といつたところ、まことに切實の感じが出てをります。伊豆の飯田守年は、

まかり路にいざやまからむ行々も花の下蔭宿り訪ひつゝ

呑氣といはうか、綽々餘裕ありといひませうか、これと比較すべきではありませんが、軍神廣瀬中佐が、彼の日露戦争に旅順港外の閉塞を行ふため母艦を出た時、

七生報國、一死心堅、再期成功、含笑上船。

と題したのは、餘裕があり過ぎる位で、従容といふやうな字は最もこれに當て嵌まることゝ思ひます。また彼の赤穂義士の辭世は、

大石の

あら樂し思ひは晴るゝ身は捨つる浮世の月にかゝる雲なし

大高源吾の

月雪の中や命の捨處

など、其他一同の者が皆満足して、死を見る態度であるのは、實に見上げたものではありませんか。

次に聊か變り種——少々野卑な言葉ですが——を申し上げますと、人間最後の時まで相當慾張つた言ひ草那があります。例の會呂利新左衛門、臨終の時、秀吉が何か遺言はないかと尋ね

た處『何か冥土へ御傳言はありませんか、お手紙でもあらば持つて行きます。但片便りで返事だけは持つて歸れませんか』といひ、

御威光で三千世界手に入らば極樂淨土我にたまはれ

と辭世して瞑目したとの事であります。狂歌師の天野廣丸、鎌倉の人で、醉龜亭と號し、性來の酒好き、何處へ行くにも徳利を提げ、しまひには着物の紋まで徳利の紋にしたといふ稀世の酒豪、酒百首の吟があり『汲む酒は是風流の眼なり月を見るにも花を見るにも』といひました。『酒なくて何の己が櫻かな』を、もつと強調したもので、かうなると随分徹底的なのですが、この人の辭世が、

心あらば手向けてくれよ酒と水錢のある人錢のない人

つまり錢のある人は酒、無い人は水をといふのです。同じ狂歌師の文車庵文員のは、

程遠き死出の旅路は諺のかねのわらちをいかで履くべき

これも相當滑稽ですが、有名な畫師、英一蝶の四世の孫、英一桂は、天保に九十六歳で歿した時、

百迄はなんでもないと思ひしに九十六ではあまり早死

と言ひ、狂歌師中の巨匠で、佐竹侯の江戸留守居役であつた手柄岡持は、七十九歳で歿しましたが、

死たうて死ぬにあらねどお年には御不足なしと言はゞいふらむ

と、洒落のめしましたが、近世では大隈侯の百二十五歳が八十五歳であつたのに比較すれば一柱の百歳對九十六歳はだいぶ割合がいいやうです。次に職業意識を最後まで働かしたといふのを二三、本因坊算砂初代は織田信長から秀吉時代に圍碁の名手と稱へられ、天覽にまで入つたのですが、其の辭世、

甚なりせば劫をもたてゝ生くべきに死ぬる道には手もなかりけり

また力士小野川喜三郎、これは江戸の横綱で天明の頃、東の大關が谷風、西が小野川、ある時の手合せに、谷風が米屋の門を通つた。何か一つ力試しを願ひたいと言つたものがあつたので、其場の米俵を左右の手に持つて、拍子木のやうに拍つた。繰返すこと十二三回、人皆驚き呆氣にとられた。そのあとへちやうど小野川がやつてきたので、今かうくゞだつたから、關取もやつてくれと言つて見物がきかない。そこで小野川も三四回同じ事をやつたが、こんな事は十遍でも二十遍でもたゞ繰返す許りだといつて、あとはやらなかつた。此日の取組は小野川の

勝ちになつたのですが、分別の深い人で、歌なども詠み、短冊の筆蹟も美しく残つてをり、三十九歳で歿しましたが、其辭世、

おのれやれ谷風ならば投げもせん無常の風に手もなかりけり

それから浮世繪師の大家、歌川廣重、八釜しい東海道五十三次の錦畫の筆者、辭世が、

東路へ筆を残して旅の空西の御國の名どころを見ん

西方淨土の名所をまでは繪にしやうとはいはなかつたのでせうが。大阪の商人、紀伊國屋亦右衛門、其本家の主人に見込まれて、百兩の金を資本に與へられ、之を千兩に増殖しました、ところが、其儘渡されて、更に之を十萬兩にせいとの事、そこで大に働いて命令通りに致しました。主人又曰く、お前の腕なら之を百萬兩に出来るだらうと、又其儘與へられた。亦右衛門人間の慾の限りないのが、つくづく厭になつて、其金を擲つて遁世し、大融寺の僧となつて一生を畢りました。其辭世に

落ちてゆく奈落の底をのぞき見て如何ほど深き慾の穴ぞや

それから鼠小僧次郎吉、名代の怪盜、東京の回向院に碑があります、職業意識といふ箇所です甚だ可笑しいですが、昔から商賣往來にもない商賣といはれてをりまするので、其辭世に

天が下古きためしは白浪の身には鼠とあらはれにけり

石川五右衛門の『石川や濱の眞砂』の大には及ばないやうであります。

だいぶ時間も切迫しましたから、最後に世の中を茶化したもの、人を喰つたものなど、少し陳べて見ませう。和歌連俳の大家で、其墨蹟は非常に珍重がられる山崎宗鑑、此人の書いたものが何でも一筆あれば、其家は家難を除けられるといふ、一代の奇人、其辭世に、

宗鑑は何處へと人の問ふならばちと用ありてあの世へと言へ

また京都の俳人、芦田鈍永、

死とむなと書くが辭世のあい言葉うそつき仕舞今日の只今

とうく本音を吐いて、死にたくないを發表したのでせう。大和の人、中島詮海は學者を以て聞えてゐますが、

いつの年いつの頃ぞと思ひしに今月のけふ今ぞ往生

全く此通りのことで、それから江戸の儒醫茨木春朔、

南無三寶あまたの樽をのみほして身は明樽とかへる故郷

歿してから同じ酒呑仲間が寄つて、小石川の祥雲寺に碑を建て、酒徳院醉翁樽枕居士と云うた

との事、可なり采れた話で、前申しました天野廣丸と相比すべき酒徒といはねばなりません。
十返舎一九の、

此世をばどりやお暇にせん香の烟となりてハイ左様なら

は、誰知らぬものない有名な話で、其遺言に死體の衣物を解いてはいけない、其儘火葬にせよといつたので、其通りに處したが、猛火炎々として衣物に燃え移るや、パチ／＼と音して、光が閃いた瞬間に、一面に火の玉のやうなものが飛出し、あたりは時ならぬ百花繚亂、これは豫め衣物へ花火を仕込んで置いたので、生前は勿論、死後までも人を玩弄にしたところに、一九の面目躍如たるものがあります。狂歌師の紀定丸が

狂歌師も今日か明日かとなりけり紀の定丸も定めなき世に

といつたのも、中々趣があります。

實川延若丈の先代の辭世が

あだし野の煙りに近くなりぬれば傍なる人に煙たがらるゝ

とありましたが、相當なものではありませんか。

尙いろ／＼ありますが、時間が來ましたので終りいたします。(昭和九、三、三一、放送)